



## 新刊紹介

### 『Le goût du café au lait』

- Une japonaise à Paris -

(L'Harmattan 社)

三嶋 愛子

今回私の仏語小説第二作 Le goût du café au lait (サブタイトル - Une japonaise à Paris) が出版されました。自伝的なもので、半世紀以上パリに生きた日本の女性が留学生時代を回顧する形になっています。130ページの中編ですが、“第一歩”、“ソルボンヌ”、“五月事件”など29章に分かれていますので読みやすいです。

私がパリに第一歩を踏み入れたのは1958年でした。オペラ座を始め、コメディ・フランセーズ、ルーブルもまだ清掃されておらず煤で真っ黒でしたが、それがとても厳めしく、長年の伝統を感じさせたのを覚えています。オルセー美術館はまだ無くて印象派の絵はチュイルリー公園の隅のJeu de PaumeとOrangerie美術館に陳列されていました。日本人の数も少なく、よくベトナム人と間違えられたものです。翌1959年の新年は日本大使館のパーティーに全留学生が招かれ、文学者も音楽家も柔道家も皆一堂に会してとてもアットホームな雰囲気でした。バスの後部が展望車式になっていてそこで車掌が紐を引っ張ってちんちんと発車合図をしたのが懐かしく思い出されます。

フランスの社会は第二次大戦の疲弊からまだ抜け切れておらず、その上仏印戦争、アルジェリアの独立戦争があって必ずしも明るくありませんでした。又10年後には学生運動に端を発し国中の大ストになった有名な五月事件があったりで激動していたと言えるでしょう。

そうした中で私は最初のうちこそ陰鬱な冬や孤独に悩まされたものの慣れるにつれ美しい自然や情緒に満ちた町の魅力に惹かれて行きました。美術館や展覧会、講演会にも足しげく通いました。こうしてパリやフランスについて学ぶにつれもっと奥へ進みたい、フランスのみならず欧州も知りたいと情熱を燃やし、フランス語の習得が終わってもどうしても帰国の決心がつかずパリに留まったというのが私の半生です。

昔は良く“海外に出ると地球の丸いのが見える”と言われてきました。今は宇宙飛行士が現実に地球の丸いの見ているわけですが、、半世紀にわたるパリの歴史と共に生きた私は日本に閉じこもっていたら想像もつかないような体験をしたと思います。今回の作品でその体験の一部を語る事ができて嬉しいです。



三嶋 愛子 (みしま あいこ 会員)

1958年仏語留学生として渡仏。  
1961年より仏国三菱商事会社に勤務。  
1994年定年後小説を書き始め、  
2014年6月第一号作品 Le goût du motchi、  
2017年12月 Le goût du café au lait を  
いずれも L'Harmattan 社より出版。  
(お近くのどの書店でも購入できます)